



Title	地域類型論的観点から見たツングース諸語の定動詞における3人称標示：数の対立を中心に
Author(s)	白, 尚燁
Citation	北方言語研究, 6, 53-71
Issue Date	2016-01-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60794
Type	departmental bulletin paper
File Information	04baek.pdf



地域類型論的観点から見たツングース諸語の定動詞における3人称標示¹ —数の対立を中心に—

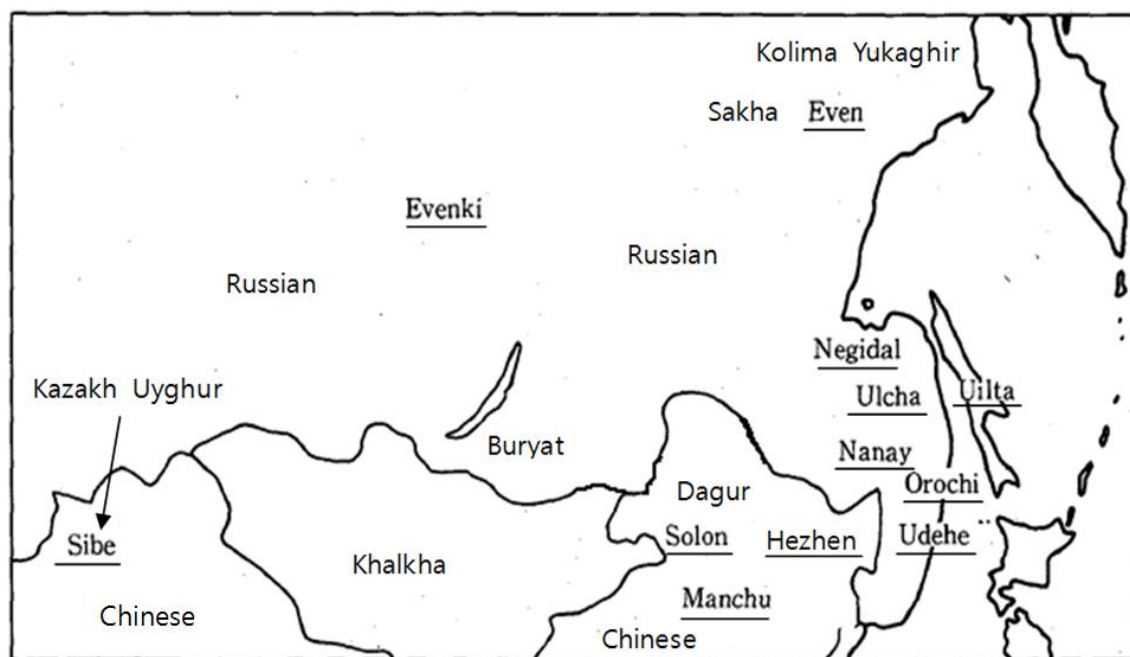
白 尚 燐

(北海道大学大学院博士課程)

0. はじめに

ツングース諸語は、図 1で示すように、東シベリアからロシア極東・中国東北部・新疆ウイグル自治区にかけて分布している言語である。ツングース諸語は、コリマ・ユカギール語、サハ語、ロシア語、モンゴル諸語、中国語など、多様な言語と隣接し、周辺言語と接触した可能性が指摘されてきた。本稿は、ツングース諸語の定動詞直説法における3人称標示²が地域的分布によって異なることを示し、この相違が周辺言語との接触に起因する可能性を提起する。

図 1. ツングース諸語（下線標示）と周辺言語の分布（Tsumagari 1997に基づいて筆者加筆）



¹ 本稿は、International Conference: Northeast Asia and the North Pacific as a Linguistic Area (Sapporo, Aug. 20-21, 2015)で発表した内容をもとに、加筆・修正を行ったものである。

² 本稿における3人称標示は、3人称主語のみで現れる形式に限定する。そのため、1PL, 2PL, 3PLの複数主語全般に見られる複数接辞や相互・共同接辞などは、たとえ人称標示の全体系からみて3人称複数標示の効果をもたらしたとしても、3人称標識として見なさない。但し、3PLに限って用いられる複数接辞や相互・共同接辞は3人称標識として認める。

・定動詞（直説法）の定義

本稿における定動詞直説法（以下「定動詞」と称する）は、話し手が事実であると認識する出来事を表す際に用いられる形式で、専ら動詞述語としての統語機能のみ見られる動詞形式を指す。当然ながら、命令法、接続法、願望法などは排除される。

1. 3人称標示の類型的パラメータ

本節では、本稿で扱う定動詞における3人称標示の類型的パラメータを示す。通言語的観点から見て、言語は動詞述語構造に主語の人称に関する情報が標示されるか否かによって、(i) 人称標示型と(ii) 人称非標示型の2つに分かれる³。

(i) 人称標示型(ラテン語)

a) *vulgus hīc est.*
crowd.M.SG.NOM here be.IND.PRS.3SG
「群衆はここにいる。」

(ii) 人称非標示型(日本語)

b) *kjou kare-ha gakkou-e ik-u.*
today he-TOP school-DIR go-N.PST
「今日彼は学校へ行く。」

(Mondon 2015: 59)

人称標示型は、さらに3人称における数の対立によって、(iii) 義務的対立型、(iv) 任意的対立型、(v) 非対立型の3つに分類できる。まず、スペイン語 (c, d) は、3人称 (1, 2人称も同様) において、常に単数と複数の対立が明確である義務的対立型の言語である。しかし、トルコ語(e, f) は、名詞複数接辞-*lar*を用いて選択的に3人称複数を示しうることから、任意的対立型に属する。アイヌ語 (g) は、1, 2人称と違い、3人称に限って数の弁別が見られない非対立型である。

(iii) 義務的対立型 (スペイン語)

・ 3人称単数

c) *Pedro viene de la provincia.*
Pedro come.IND.PRS.3SG from ART province
「ペドロは地方から出てきている。」

・ 3人称複数

d) *ellos vienen muy temprano.*
they come.IND.PRS.3PL very early
「彼らはとても早く来る。」

(瓜谷 2008 (2002): 58)

(iv) 任意的対立型 (トルコ語)

・ 3人称単数or複数

e) *gel-ijor-ø.*
come-PRS-3
「彼(ら)は来つつある。」

・ 3人称複数

f) *gel-ijor-lar.*
come-PRS-PL
「彼らは来つつある。」

(林 2013: 142)

(v) 非対立型 (アイヌ語)

・ 3人称単数or複数

³ 本稿では、筆者の方針により表記、グロス分析、和訳を施した例文がある。

g) **itak-ø.**

speak-3

「彼（ら）は話す。」

(Shibatani 1990: 25)

以上のことに基づき、本稿は下記の4つの3人称標示の類型的パラメータを中心に、ツングース諸語と周辺言語を検討する。

図 2. 3人称標示の類型的パラメータ

・ 義務的対立型	} 人称標示型
・ 任意的対立型	
・ 非対立型	
・ 人称非標示型	

2. ツングース諸語⁴

本節は、ツングース諸語の定動詞形式を提示した上で、各言語の定動詞における3人称標示について検討する。

2.1. ツングース諸語の定動詞

Ikegami (2001 (1983)) は、次のように、ツングース諸語の直説法語尾が、付加する人称接辞のタイプによって2つ (Class I, Class II)に分類でき、Class I 動詞語尾は、動名詞（いわゆる形動詞）を構成する形式でもあると述べている。定動詞(Class II)は、多様な統語機能（名詞的、連体的、述語的）を持つ形動詞(Class I)と違い、述語的統語機能のみを持つ。

The indicative endings may be grouped into two classes, I or II according to whether an indicative ending is accompanied by a personal ending of either Set 1 or 2. …… Class I verb endings also serve in the formation of verbal nouns.

(Ikegami 2001 (1983): 370)

Ikegami (2001 (1983))の分類に基づき、ツングース諸語の定動詞語尾(Class II)⁵を表 1にまとめる。Ikegami (2001 (1983))に言及されていないツングース諸語の定動詞に関しては、

⁴ 本稿におけるツングース諸語の系統的分類は、下記のIkegami (1974)にしたがう。但し、ホジェン語に関しては、風間 (1996)にもとづく。また、地域的分布から見ると、ツングース諸語は、大きく北ツングース諸語（エウエンキー語、エウエン語）、東ツングース諸語（ネギダル語、ウルチャ語、ナーナイ語、オロチ語、ウイルタ語、ウデヘ語）、南ツングース諸語（ソロン語、ホジェン語、満洲語、シベ語）の3つに分かれる（図 1参照）。

第I群：エウエンキー語(Ek), エウエン語(E), ネギダル語(N), ソロン語(S)

第II群：ウデヘ語(U), オロチ語(Oc), ホジェン語(Hz)

第III群：ナーナイ語(Nn), ウルチャ語(Ol), ウイルタ語(Ut)

第IV群：満洲語(M), シベ語(Sb)

⁵ 但し、本稿における定動詞の定義に従い、命令法や願望法と分類される動詞語尾は含めない。

李 (2006) (ホジェン語)、津曲 (2002) (満洲語)、久保 et al. (2011) (シベ語)⁶にしたがう。下記の表 1を見ると、北ツングース諸語の定動詞は、非未来と未来の対立体系を成していることがわかる。一方、南ツングース諸語は、現在と未来が非過去（非完了）に統一されているのが特徴である。東ツングース諸語（ネギダル語を除く）に関しては、原則的に過去・現在・未来時制において定動詞形式が見られるが、言語によっては一部の時制が形動詞にとって代わっている。東ツングース諸語のうち、もっとも北に位置するネギダル語は、定動詞語尾(-ja)を用いて現在または過去の出来事を表す点において、北のツングース諸語と部分的に共通している。本稿は、下記の表 1で示す定動詞語尾に用いられる3人称標示に焦点を当てる。

表 1. ツングース諸語の定動詞（直説法）語尾 (Ikegami 2001 (1983), 李 2006, 津曲 2002, 久保 et al. 2011に基づいて筆者が作成)

		PRS	PST	FUT
北	Ek (I)	-rA or -∅	-rA or -∅	-jA(rA)
	E (I)	-r(A)	-r(A)	-ji(r)
東	N (I)	-ja or -∅	-ja or -∅	形動詞
	Ol (III)	-rA or -∅	形動詞	-(r)ilA
	Nn (III)	-rA or -∅	-kA	-jaa(n)+(ra)
	Oc (II) ⁷		形動詞	
	Ut (III)	-rA	-tA	-rilA
	U (II)	-dA or -∅	-kA	-jA
	S (I)	-rA or -∅	形動詞	-rA or -∅
南	Hz (II)	-rA or -∅	形動詞	-rA or -∅
	M (IV)	-mbi	-hAbi	-mbi
	Sb (IV)	-mi	-xəi	-mi

2.2. 第 I 群

ロシア領の北部側に分布するエウエンキー語⁸、エウエン語、ネギダル語の定動詞は、下記の表 2 と用例 (1-8) のように、3 人称複数標示と異なる 3 人称単数標識-n が固定されていて、常に 3 人称単数と複数の対立が保たれる。しかし、同じく第 I 群に属する、中

⁶ シベ語の進行形-maxɣaiは、ほかのツングース諸語との対応が想定できないため、排除した。

⁷ オロチ語においては、形動詞のみ見られるため、本稿では扱わない。

⁸ エウエンキー語の中国領方言であるオロチョン語の記述 (Hu 1986) によると、オロチョン語も、北ツングース諸語と同じく、3人称において数の対立(3SG:-n, 3PL:-∅)が見られると記述されている。しかし、Li (2005) は、比較的若い世代 (40~50代) の話者によるデータに基づき、動詞述語構造における人称標示による対立がほぼ消失していること (i.e. 1SG:-m (or -n), 1SG以外:-n) を指摘している。ここからも、3人称標示の変化がうかがえる。但し、高齢の世代においては、数の対立が残っているようである。

国の東北部で話されるソロン語では、3 人称単・複数が両方同じ形式-*n* で示されるため、3 人称において数の対立が見られない（用例 9, 10 参照）。

表 2. 第 I 群の定動詞における3人称標示 (Nedjalkov 1997, Malchukov 1995, Cincius 1982, Pevnov & Khasanova 2003, Poppe 1931, Hu & Chaoke 1986, Tsumagari 2009に基づいて筆者が作成)

	Ek	E	N	S
3SG	- <i>n</i>	- <i>n</i>	- <i>n</i>	- <i>n</i>
3PL	- $\emptyset$	(- <i>r</i>)	- $\emptyset$	- <i>n</i>

エウエンキー語

・3人称単数

- 1) asa-tkan ĵu-du **təgə-t-čə-rə-n.**
 woman-DIM house-DAT sit.down-STAT-IMPV-N.FUT-3SG
 「あの女の子は家に座っている。」

(Nedjalkov 1997: 248)

・3人称複数

- 2) digin oron-duu **ugu-ča-ja-ra- $\emptyset$.**
 four deer-DAT ride-STAT-IMPV-N.FUT-3PL
 「彼らは4頭のトナカイに乗っている。」

(Bulatova & Grenoble 1999: 32)

エウエン語⁹

・3人称単数

- 3) kūŋa-w **höŋa-d-da-n.**
 child-1SG cry-PROG-N.FUT-3SG
 「私の子が泣いている。」

- 4) ərək ərək niməər ənən-ni tiik **ikəə-ji-n,**
 this this neighbor mother-3SG now sing-FUT-3SG
 hūnaajı **boo-ji-n** mut ömölğö-dü-t
 daughter.REF.SG give-FUT-3SG 1PL.INCL.GEN boy-DAT-1PL.INCL
 「今この隣人のお母さんは歌い、自分の娘を私たちの息子にくれるだろう。」

・3人称複数

- 5) tam kury kuruussal əčin **kuləjdəə-məč-ə-d-də- $\emptyset$.**
 there chicken chicken.PL like.this go.for.a.walk-RECP-E-PROG-N.FUT-3PL
 「あそこで鶏たちは歩き回っている。」

⁹ 本稿に挙げたエウエン語（西方言）のデータは、Brigitte Pakendorf先生からいただいたエウエン語テキスト（未公刊の電子資料）によるものである。ここに記して謝意を表したい。

- 6) ilə tala örön-düla hər-ji-r, örö-l-bür it-či-r.
 where there reindeer-LOC go-FUT-3PL reindeer-PL-REF.PL see-FUT-3PL
 「彼らは、あちこちトナカイのところへ行き、自分のトナカイを見るだろう。」

ネギダル語

・3人称単数

- 7) amŋa-dokka-n səəksə juu-jə-n.
 mouth-ABL-3SG blood come.out-N.FUT-3SG
 「(彼の) 口から血が出ている。」

(風間 2002: 59)

・3人称複数

- 8) ju-l asa-l baldi-ja-ø.
 two-PL woman-PL live-N.FUT-3PL
 「二人の女が住んでいた。」

(Pevnov & Khasanova 2003: 83)

ソロン語

・3人称単数

- 9) imanda imanda-ji-ra-n.
 snow snow-PROG-IMP-3
 「雪が降っている。」

(Hu & Chaoke 1986: 63)

・3人称複数

- 10) aba ənee juuri jaanji-maaši-ji-ra-n.
 father mother two say-RECP-PROG-IMP-3
 「父と母は二人で話し合っている。」

(Hu & Chaoke 1986: 62)

2.3. 第Ⅱ群

ウデヘ語は、形動詞によって表される現在時制の3人称を除き、定動詞の3人称標示が単・複数両方とも-øになっている (Girfanova 2002, Kazama 2010a参照)。しかし、ウデヘ語は、白 (2013), Baek (2014) で論じたように、動詞派生接辞-*du*を用いて定動詞の3人称複数を標示することが可能である (用例 12参照)。このような動詞派生接辞による3人称複数標示現象は、他のツングース諸語には確認できない。一方、中国領に属するホジェン語に関して、李 (2006) は3人称のみ定動詞が使われ、単数と複数に関係なく、-*n*または-øが付加されると記している (用例 13, 14参照)。つまり、ホジェン語も、ソロン語と同じく、3人称単・複数の対立が欠けていることがわかる。

表 3. 第Ⅱ群の定動詞における3人称標示 (白 2013, Baek 2014, 李 2006に基づいて筆者が作成)

	U	Hz
3SG	-∅	(-n)
3PL	(-du-)	(-n)

ウデヘ語

・3人称単数

- 11) nii **mafala-ja-∅** sii sitə-tigi-i uti kuliga-tigi.
 who marry-FUT-3 2SG.NOM child-DIR-2SG that snake-DIR
 「誰が結婚するでしょうか、あなたの子供と、あの蛇のところへ」

(風間 2004: 299)

・3人称複数

- 12) nuati **ḡəḡə-(du)-ja-∅.**
 they go-PL-FUT-3
 「彼らは行くだろう。」

(白 2013: 118)

ホジェン語

・3人称単数

- 13) niani təčkən **əmə-rə-∅.**
 he really come-IMPF-3
 「彼は本当に来る。」

(李 2006: 143)

・3人称複数

- 14) ti nio gərən gurun ai-ji **xəsu-rə-∅.**
 that person all people good-INS say-IMPF-3
 「皆彼のことをよく言う。」

(李 2006: 143)

2. 4. 第Ⅲ群

Ikegami (2001 (1983): 369) によると、第Ⅲ群のツングース諸語の定動詞には3人称複数主語に現れる名詞複数接辞-*l*を除き、3人称標識は存在しないという。言い換えれば、3人称複数標示の名詞複数接辞-*l*以外、3人称標示は無標になっているということである。ウルチャ語とウイльта語の定動詞における名詞複数接辞-*l*は、下記の表 4と用例 16, 18のように、必須の形式ではない。先行記述 (Sunik 1985, 風間 2010c, 山田 2013) でも、名詞複数接辞-*l*を任意的な要素として取り上げている。またナーナイ語に関しても、テキスト資料による用例 20を見ると、複数形の同時副動詞-*mAAri* (単数形は-*mi*) から主語が3人称複数であることがわかるが、この文の主動詞*bi-*の定動詞現在形に3人称複数標識-*l*は見

られない。しかし、用例 21は、複数形の副動詞-*mAAri*が用いられる同じ環境で、主動詞 *bi-*に3人称複数主語を示す名詞複数接辞-*l*が付いている。また、同主語条件文の用例 22 は、従属節の述語*saa-xam-bari* (know-PTCP.PST-REF.PL)に複数主語であることが明記されているにもかかわらず、主節の述語に3人称複数標示が欠如している。これらのように、ナーナイ語の名詞複数接辞-*l*も、3人称複数主語に現れたり、現れなかったりすることから、義務的な要素ではないと考えられる。

表 4. 第Ⅲ群の定動詞における3人称標示 (風間 2001, 2010b, 2010c, Sunik 1985, 山田 2013に基づいて筆者が作成)

	Ol	Ut	Nn
3SG	-∅	-∅	-∅
3PL	(-l)	(-l)	(-l)

ウルチャ語

・3人称単数

- 15) *tii nju tii bi-lə-ø=mə sagdan-dala=da.*
 that man that be-FUT-3=CLT grow.old-TERM.CVB=CLT
 「その人はそうして暮らすだろう、年老いるまで、だ。」

(風間 2010c: 107)

・3人称複数

- 16) *utili-i gur-səl otillii-lə-ø=mə.*
 able-PTCP.PRS person-PL able-FUT-3=CLT
 「できる者たちはできるだろう。」

(風間 2008: 177)

ウイльта語

・3人称単数

- 17) *dolbojʃillaa-ø.*
 get.dark+FUT-3
 「間もなく夜になる。」

(池上 2002: 116)

・3人称複数

- 18) *sumbeepə waa-rillaa-ø sugdəækki nari-sal unʃi-ni.*
 2PL.ACC kill-FUT-3 sloppy person-PL say.PTCP.PRS-3SG
 「“あんたらを殺すでしょう、ならず者らが”と言う。」
jə-du. sumbeepə waa-rillaa-l.
 this-DAT 2PL.ACC come+FUT-PL
 「“ここで”。」「“あんたらを殺すでしょう”。」

(池上 2002: 133)

ナーナイ語

・3人称単数

- 19) orkin ĵaka o-ĵaraa-ø.
bad thing become-FUT-3
「悪いことが起こるだろう。」

(風間 2010b: 114)

・3人称複数

- 20) ĵuə mapa-kaan piktə-ni bi-ə undə.
two bear-DIM child-3SG be-PRS.3 say
kupiləəndu-məəri=ə bi-ə undə.
play.around-SIM.CVB.PL=CLT be-PRS.3 say
「二匹の小熊の子供がいるという。遊び回っているという。」

(風間 2001: 52)

- 21) təwəksə ojala-ni tooko-maari=o bi-ə-l undə
cloud upside-3SG climb-SIM.CVB.PL=CLT be-PRS-PL say
təi mapakaa-sal=gola.
that small.bear-PL=CLT
「雲の上に上っているという、その、小熊たちは。」

(風間 2001: 58)

- 22) sii mimbiə bao-go-xam-ba-si saa-xam-bari osini,
2SG.NOM I.ACC find-REP-PTCP.PST-ACC-2SG know-PTCP.PST-REF.PL if
mimbiə ĵi-dəə waa-ĵaraa-ø.
I.ACC come-ANT.CVB kill-FUT-3
「おまえが私を見つけたことを彼らが知ったなら、私をやってきて殺すだろう。」

(風間 2010b: 137)

- 23) əi-du xəm waa-go-ĵaa-l təi ŋəwəə-səl.
this-DAT all kill-REP-FUT-PL that devil-PL
「ここで全員殺すだろう、あの魔物たちは。」

(風間 2010b: 146)

2.5. 第IV群

満洲語とシベ語は、下記の用例 24-27のように、定動詞に人称が標示されない人称非標示型の言語である。

満洲語

・1人称単数

- 24) bi hərgən bə ara-mbi.
I letter ACC write-IMPF
「私は手紙を書く。」

・3人称単数

- 25) i boo bə wəiə-mbi.
(s)he house ACC build-IMPF
「彼は家を建てる。」

シベ語

・1人称単数

26) bi gulgulu uju **nimə-mi.**
 I always head ache-IMPF
 「私はいつも頭が痛い。」
 (久保 et al. 2011: 82)

・3人称単数

27) tərə j̥iŋədu-či' **bədərə-mi.**
 that Kyoto-DIR return-IMPF
 「彼は京都へ戻る。」
 (久保 et al. 2011: 38)

2. 6. 小結

本稿で考察した結果を下記の表 5にまとめる。表 5を見ると、ツングース諸語の定動詞における3人称標示は、各言語の地域的分布によって北ツングース諸語（義務的対立型）、東ツングース諸語（任意的対立型）、南ツングース諸語 1（非対立型）、南ツングース諸語 2（人称非標示型）の順に変化していく傾向が確認できる。

表 5. ツングース諸語の定動詞における3人称標示

	3SG	3PL	数対立
Ek (I)	-n	-∅	義務的対立型
E (I)	-n	(-r)	義務的対立型
N (I)	-n	-∅	義務的対立型
Ol (III)	-∅	(-l)	任意的対立型
Nn (III)	-∅	(-l)	任意的対立型
Ut (III)	-∅	(-l)	任意的対立型
U (II)	-∅	(-du)	任意的対立型
S (I)	-n	-n	非対立型
Hz (II)	(-n)	(-n)	非対立型
M (IV)	-	-	人称非標示型
Sb (IV)	-	-	人称非標示型

3. 周辺言語

本節では、ツングース諸語の近隣言語であるコリマ・ユカギール語、ロシア語、チュルク諸語（サハ語、カザフ語、ウイグル語）、モンゴル諸語（ブリヤート語、ダグール語、ハルハ・モンゴル語）、中国語における定動詞の3人称標示について考察する。

3. 1. コリマ・ユカギール語

東シベリア地域で話されるコリマ・ユカギール語は、下記の表 6と用例 29のように、3

人称複数主語の定動詞述語構造に動詞複数接辞-*ŋi*-が必要とされ、常に3人称単数と複数の区別が明らかである。

表 6. コリマ・ユカギール語の定動詞における3人称標示 (Maslova 2003: 140)

	transitive <i>juø</i> - 「見る」		intransitive <i>šohie</i> - 「消える」	
	N.FUT	FUT	N.FUT	FUT
3SG	<i>juø-m</i>	<i>juø-te-m</i>	<i>šohie-j</i>	<i>šohie-te-j</i>
3PL	<i>juø-ŋaa</i>	<i>juø-ŋi-te-m</i>	<i>šohie-ŋi</i>	<i>šohie-ŋi-te-j</i>

・3人称単数

- 28) *tintan terike čaj-le oože-š-u-m.*
 that old.woman tea-INS drink-CAUS-E-3SG.TR
 「あの年を取った女性は（彼に）お茶を飲ませた。」

(Maslova 2003: 247)

・3人称複数

- 29) *ajii-nu-t taa meemee-le kudede-ŋaa n'elbet-ŋaa.*
 shoot-IMPF-IMPF.CVB there bear-INS kill.PFV-TR.3PL skin-3PL.TR
 「彼らはクマを殺して皮を剥いた。」

(Maslova 2003: 142)

3.2. ロシア語

また、ロシア語の定動詞における3人称も、用例 30, 31で示すように、数の対立は明確である。過去時制において、人称による対立は見られないが、ここでも数の対立は維持される。

・3人称単数

- 30) *kto obeda-et v restorane?*
 who have.lunch-PRS.3SG at restaurant
 「誰がレストランで昼食を食べているか。」

(城田 2010: 81)

・3人称複数

- 31) *oni vseгда obeda-jut vmeste.*
 they always have.lunch-PRS.3PL together
 「彼らはいつも一緒に昼食を食べる。」

(城田 2010: 81)

3.3. チュルク諸語

本項では、チュルク諸語のうち、東シベリアに分布しているサハ語と中国領のカザフ

語¹⁰、ウイグル語に注目する。またツングース諸語の周辺言語ではないが、必要に応じて、トルコ語についても触れる。まず、サハ語は、江畑（2013）で指摘されているように、3人称単数と複数の区別が義務的である（用例 32, 33参照）。サハ語における定動詞の3人称複数標示には、下記の表 7で示す通り、必ず名詞複数接辞*-lArが要求される。これは、名詞複数接辞-lArが3人称複数標示に任意的に用いられるトルコ語と異なる特徴である（第 1 節参照）。一方、中国領に分布するカザフ語やウイグル語は、表 7で示すように、3人称単・複数標示に同一形式が利用され、数の対立が欠如している。これに関しては、用例 34, 35, 37, 38を参照されたい。中嶋（2013: 69）では、カザフ語の動詞人称接辞において、3人称複数形に複数標示の要求はないと述べている。これは、ウイグル語も同じである。カザフ語とウイグル語は、サハ語やトルコ語において、3人称複数主語に限って義務的または選択的に現れる名詞複数接辞*-lArが、3人称複数ではなく、2人称複数主語の定動詞（用例 36参照）に付く。要するに、チュルク諸語の3人称標示においても、地域的要因（サハ語（北）：義務的対立型、トルコ語（中間）：任意的対立型、カザフ語・ウイグル語（南）：非対立型）が関わっている可能性が考えられる。

表 7. サハ語、カザフ語、ウイグル語の定動詞における3人称標示¹¹ (Stachowski & Menz 1997, Geng & Li 1985, 中嶋 2013, Zhao & Zhu 1985, 竹内 1991に基づいて筆者が作成)

	サハ語			カザフ語		ウイグル語	
	PRS	PST	FUT	N.PST	PST	N.PST	PST
3SG	-Ar	-tA	-lAr-A ~ -lA	-dɪ	-ø	-du	-ø
3PL	-Al-lAr	-tɪlAr	-lAx-tArA	-dɪ	-ø	-du	-ø

サハ語

・3人称単数

- 32) kenčeeri bujuul sajuulug-ar taxsu-bat-ut-tan.
 Kenceeri this.year summer.house-3SG.DAT go.out-PTCP.NEG.PRS-3SG-ABL
munčaar-ar.
 get.disappointed-PRS.3SG

「ケンチェーリは今年夏の家に出かけられないために気落ちしている。」

(江畑 2013: 14)

・3人称複数

- 33) saŋa tutuu-nu sœbylee-bekke moskuba-ŋa yŋs-el-ler.
 new building-ACC like-NEG.ANT.CVB Moscow-DAT complain-PRS-3PL

¹⁰ 本稿で扱うカザフ語は、中国領の新疆ウイグル自治区で話される言語を中心とする。但し、カザフ国のカザフ語においても、3人称標示は同じである。

¹¹ カザフ語(K)とウイグル語(Ug)の相互・共同形式(K:-(I)s, Ug: -(i)s~-(U)s) は、定動詞における人称標示体系から見て、3人称複数標示としての解釈も可能であるが、同形式は3PLだけではなく、ほかの複数主語にも現れるため、本稿では3人称複数標識として認めない（注2参照）。

「彼らは新しい建物を気に入らず、モスクワへ不満を言っている。」

(江畑 2013: 16)

カザフ語

・3人称単数

34) kün bat-ti-ø.

sun set-PST-3

「太陽が沈んだ。」

(Geng & Li 1985: 66)

・3人称複数

35) joldas-tar šöp šap-qalı ket-ti-ø.

comrade-PL grass cut-PURP.CVB go-PST-3

「同志たちは草を刈りに行った。」

(Geng & Li 1985: 81)

・2人称複数

36) sender qašan qajt-ıp kel-di-ŋder?

2PL.NOM when return-ANT.CVB come-PST-2PL

「あなたたちはいつ戻って来たのか」

(Geng & Li 1985: 169-170)

ウイグル語

・3人称単数

37) bu bala mäktäp-tä 'oqu-j-du.

this child school-LOC study-N.PST-3

「この子は学校で勉強する。」

(竹内 1991: 163)

・3人称複数

38) balilar qora-da 'ojna-p jür-i-du.

child.PL garden-LOC play-ANT.CVB walk-N.PST-3

「子供たちは庭で遊んでいる。」

(竹内 1991: 309)

3.4. モンゴル諸語¹²

モンゴル諸語のうち、東ならびに南ツングース諸語と隣接しているブリヤート語、ダグール語、ハルハ・モンゴル語を検討する。ブリヤート語はロシア領と中国領で、ダグール語は中国領に属するモンゴル系の言語である。また、ハルハ・モンゴル語は、モンゴル国の言語である。まず、ロシア領のブリヤート語に関する記述である栗林 (1992), Skribunik (2003)によると、ブリヤート語の定動詞における3人称複数標示は、名詞複数接辞-dによって任意的に示されると記述されている¹³。次に、Tsumagari (2003: 148)は、ダグール語の動詞述語構造における3人称複数主語が名詞複数接辞-sul¹⁴で標示されると記している。但

¹² ブリヤート語やダグール語は、動詞形式（定動詞、形動詞）と関係なく、動詞述語構造に同じ人称語尾が付く。但し、定動詞と形動詞の区別は存在し、ここでは定動詞に重点を置く。

¹³ 一方、中国領に分布するシネヘン・ブリヤート語においては、3人称標示が単・複数両方とも無標であるため、非対立型として分類される（Yamakoshi 2011参照）。したがって、ブリヤート語の内部でも、分布地域と3人称標示の違いが相関している可能性がある。

¹⁴ ダグール語の名詞複数接辞-sulは、ツングース諸語の名詞複数接辞-saiと類似していることから、ツン

し、同形式が義務的であるか否かに関しては言及されていない。しかし、ほかのダグール語の記述文法（Zhong 1982, Todaeva 1986, Sung et al. 2010）において、3人称標示が、用例 39, 40のように、数と関係なく、無標で現れる用例が確認できることから、**-sul**は任意的な要素であると考えられる。最後に、ハルハ・モンゴル語（用例 41, 42）は、動詞述語構造に人称が標示されない人称非標示型である。

表 8. モンゴル諸語の定動詞における3人称標示¹⁵ (栗林 1992, Skribunik 2003, Zhong 1982, Todaeva 1986, Tsumagari 2003, Sung et al. 2010に基づいて筆者が作成)

	ブリヤート語	ダグール語	ハルハ・モンゴル語
3SG	-∅	-∅	-
3PL	(-d)	(-sul)	-

ダグール語

・3人称単数

39) tərə xu **ir-iḵə-bəj-∅.**
that man come-PROG-IMPF-3SG
「あの人が来ている。」

・3人称複数

40) əd **jaw-ḵə-bəj-∅.**
that.PL go-PROG-IMPF-3PL
「彼らが行っている。」

(Sung et al. 2010: 67)

ハルハ・モンゴル語

・1人称単数

41) bi önöödör japon ruu **jaw-na.**
I today Japan DIR go-PRS
「私は今日日本へ行く。」

(山越 2012: 89)

・3人称単数

42) ojuutny naadam margaaš **exel-ne.**
student.GEN festival tomorrow begin-PRS
「学園祭は明日始まる。」

(山越 2012: 90)

3.3. 中国語

最後に、中国語は動詞述語に人称標示が付加されない人称非標示型の言語である（下記の用例参照）。

中国語

・1人称単数

43) wǒ qí hēi mǎ.
I ride black horse
「私は黒馬に乗る。」

・3人称単数

44) dìdì qí bái mǎ.
younger.brother ride white horse
「弟は白馬に乗る。」

(Sun 2006: 149)

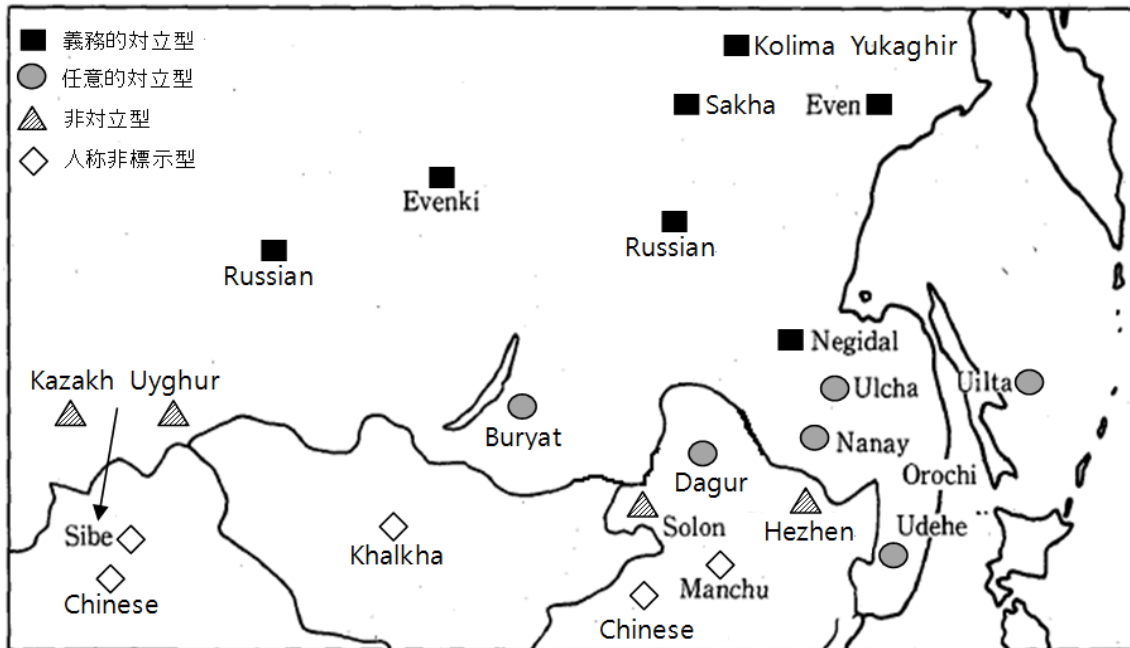
グース諸語からの影響によって生じた可能性が考えられる。

¹⁵ ブリヤート語やダグール語の間に分布するハムニガン・モンゴル語においても、持続 (durative) を示す定動詞に、名詞複数接辞 **-d** による任意的3人称複数標示現象が見られると報告されている (Janhunnen 2003参照)。

4. おわりに

本稿は、地域類型論的観点からツングース諸語の定動詞における3人称標示の違いについて考察した。その結果、下記の図 3 で示すように、ツングース諸語と近隣言語は、その地域的分布と3人称標示の相違が相関していることが確認できた。

図 3. ツングース諸語と周辺言語の定動詞における3人称標示



最初に、ロシア領の北部に分布するエウエンキー語、エウエン語、ネギダル語は、3人称複数標示と対立する3人称単数標示-*n*が義務的な要素であるため、常に3人称単数と複数が明確に区別される。このような義務的対立は、隣接しているコリマ・ユカギール語、サハ語、ロシア語にも同じく観察される。次に、東ツングース諸語（オロチ語を除く）は、すべて任意的な要素で3人称複数を標示することで、3人称単数と複数の区別が可能になる。近隣言語であるモンゴル諸語（ブリヤート語、ダグール語）も同様に任意的対立型である¹⁶。ウデヘ語を除いた東ツングース諸語（ナーナイ語、ウルチャ語、ウイльта語）は、名詞複数接辞で選択的に3人称複数主語を示す点においても、これらのモンゴル諸語と一致している。ウデヘ語に関しては、同じく任意的対立型だが、動詞接辞-*du*を用いて3人称複数を標示する点で、ほかの東ツングース諸語と異なっている。これは、ウデヘ語が音韻変化によって名詞複数接辞-*l*を失った結果であると推測される（白 2013, Baek 2014参照）。最後に、南ツングース諸語は2つのグループに分かれ、ソロン語とホジェン語は、3人称に数の対立が欠けている。このような非対立現象は、南チュルク諸語のカザフ語とウイグル語にも見られる。これらの言語の間に、接触が起こった可能性は考えられないが、同じく中国領に属することは興味深い。一方、最も南側に分布している満洲語とシベ語は、ハルハ・

¹⁶ 但し、3人称複数標示がなされる頻度に関しては、東ツングース諸語がブリヤート語やダグール語より高い。

モンゴル語や中国語と同じく、人称が標示されない人称非標示型である。以上のことから、ツングース諸語は、各言語の地域的分布によって異なる定動詞の3人称標示現象が見られ、この相違が、周辺言語と共通しているため、周辺言語による影響である可能性が考えられる。

略号一覧

1, 2, 3: 1st person, 2nd person, 3rd person, ABL: ablative, ACC: accusative, ANT.CVB: anterior converb, ART: definite article, CAUS: causative, CLT: clitic, DAT: dative, DIM: diminutive, DIR: directive, E: epenthesis vowel, FUT: future, GEN: genitive, IMPF: imperfective, IMPF.CVB: imperfective converb, INCL: inclusive, IND: indicative, INS: instrumental, LOC: locative, M: masculine, NEG: negative, N.FUT: non-future, NOM: nominative, N.PST: non-past, PFV: perfective, PL: plural, PROG: progressive, PRS: present, PST: past, PTCP: participle, PURP.CVB: purposive converb, RECP: reciprocal, REF: reflexive, REP: repetitive-reversive, SG: singular, SIM.CVB: simultaneous converb, STAT: stative, TERM.CVB: terminative converb, TOP: topic, TR: transitive, -: 接辞境界, =: 接語境界, +: 融合.

[謝辞]

本稿の執筆にあたって、日頃からご指導くださった津曲敏郎先生に深く感謝を申し上げます。また、本誌の査読者の先生方より、重要なご指摘やご助言を頂いた。ここに記して感謝を申し上げます。当然ながら、本稿におけるすべての誤りは筆者に帰するものである。

参考文献

- 白尚燁. 2013. 「ウデへ語動詞接辞-*du*の用法: 動詞派生接辞の人称標示機能」『北方言語研究』3, 111-128.
- Baek, Sangyub. 2014. Verbal suffix -*du* in Udihe. *Altai Hakpo* 24, 1-22.
- Bulatova, Nadezhda & L. Grenoble. 1999. *Evenki*. München/Newcastle: Lincom Europa.
- Cincius, Vera I. 1982. *Negidal'skij Jazyk: issledovanija i materialy*. Leningrad: Nauka.
- 江畑冬生 2013. 「サハ語の動詞屈折形式とその統語機能」『北方言語研究』3, 11-23.
- Geng, Shimin & Z. Li. 1985. *Hasakeyu Jianzhi* [=A Concise Grammar of Kazakh]. Beijing: Minzuchubanshe.
- Girfanova, Albina H. 2002. *Udeghe*. München/Newcastle: LINCOM EUROPA.
- 林徹. 2013. 『トルコ語文法ハンドブック』東京: 白水社.
- Hu, Zhengyi. 1986. *Elunchunyu Jianzhi* (=A Concise Grammar of Oroqen). Beijing: Minzuchubanshe.
- Hu, Zhengyi & Chaoke. 1986. *Ewenkiyu Jianzhi* (=A Concise Grammar of Ewenke). Beijing: Minzuchubanshe.

- Ikegami, Jiro. 1974. Versuch einer Klassifikation der tungusischen Sprache. Sprache, Geschichte und Kultur der Altaischen Völker, Protokollband der XII. Tagung der Permanent international Altaische Conference 1969 in Berlin, 271-272. Berlin Akademie Verlag.
- Ikegami, Jiro. 2001 (1983). The category of person in Tungus: Its representation in the indicative forms of verbs. *Tsunguusugo Kenkyuu*, 369-379. Tokyo: Kyuukoshoin (First appeared in: 1984 *Proceedings of the Thirty-First International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa, Tokyo-Kyoto 1983*, 332-333, The Tōhō Gakkai)
- 池上二良. 2002. 『ウイルタ口頭文芸原文集』 (ELPR publication series: A2-013, ツングース言語文化論集 16) 吹田: 大阪学院大学情報学部.
- Janhunen, Juha. 2003. Khamnigan Mongol. J. Janhunen (ed.) *The Mongolic Languages*, 83-101. London: Routledge Language Family Series.
- 風間伸次郎. 1996. 「ヘジェン語の系統的位罫について」 『言語研究』 109, 117-139.
- 風間伸次郎. 2001. 『ナーナイの民話と伝説 6』 (ELPR publication series: A2-005, ツングース言語文化論集 15) 吹田: 大阪学院大学情報学部.
- 風間伸次郎. 2002. 『ネギダール語テキストと文法概説』 (ELPR publication series: A2-021, ツングース言語文化論集 19) 吹田: 大阪学院大学情報学部.
- 風間伸次郎. 2004. 『ウデヘ語テキスト (A)』 (ツングース言語文化論集 24/A) 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 風間伸次郎. 2008. 『ウルチャロ承文芸 4』 (ツングース言語文化論集 43) 府中: 東京外国語大学.
- 風間伸次郎. 2010a. 『ウデヘ語テキスト 6』 (ツングース言語文化論集 47) 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 風間伸次郎. 2010b. 『ナーナイの民話と伝説 12』 (ツングース言語文化論集 48) 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 風間伸次郎. 2010c. 『ウルチャロ承文芸原文集 5』 (ツングース言語文化論集 49) 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 久保智之・児倉徳和・庄声. 2011. 『シベ語の基礎』 府中: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 栗林均. 1992. 「ブリヤート語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典第 3 巻: 世界言語編: 下-1』, 814-827. 東京: 三省堂.
- Li, Fengxiang. 2005. Contact, attrition, and structural shift: evidence from Oroqen. *International Journal of the Sociology of Language* 173, 55-74.
- 李林静. 2006. 『ホジェン語の動詞構造』 【博士論文】 千葉: 千葉大学大学院社会科学文化研究科.
- Malchukov, Andrej L. 1995. *Even*. München/Newcastle: Lincom Europa.
- Maslova, Elena. 2003. *A Grammar of Kolyma Yukaghir*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Mondon, Jean François R. 2015. *Intensive Basic Latin: A grammar and workbook*. London/New York: Routledge.
- 中嶋善輝. 2013. 『カザフ語文法読本』 東京: 大学書林.

- Nedjalkov, Igor V. 1997. *Evenki*. London: Routledge.
- Pevnov, A.M. & M.M. Khasanova. 2003. *Mify i Skazki Negidal'tsev*. ELPR publication series: A2-024, Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- Poppe, Nicholas. 1931. *Materialy po Solonskomu Jazyku*. Leningrad: AN SSSR.
- Shibatani Masayoshi. 1990. *The Languages of Japan*. (Cambridge Language Surveys.) Cambridge: Cambridge University Press.
- 城田俊. 2010. 『現代ロシア語文法（改訂新版）』 東京：東洋書店.
- Skribunik, Elena 2003. Buryat. J. Janhunen (ed.) *The Mongolic Languages*, 102-128. London: Routledge Language Family Series.
- Stachowski, M. & A. Menz. 1997. Yakut. Johanson, Lars and Csátó, Éva Á (eds.) *The Turkic Languages*, 417-433. London: Routledge.
- Sun, Chaofen. 2006. *Chinese: A Linguistic Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sung, Baekin et al. 2010. *Jungukeui Dagureueowa Eoweongkieoeui Munpeop Eohwi Yeonku* [=Grammar and Lexicon of Dagur and Ewenki Spoken in Chinese). Seoul: Acanet.
- Sunik, O. P. 1985. *Ul'cskij Jazyk*. Leningrad: Nauka.
- 竹内和夫. 1991. 『現代ウイグル語四週間』 東京：大学書林.
- Todaeva, B. X. 1986. *Dagurskij Jazyk*. Moskva: Nauka.
- Tsumagari, Toshiro. 1997. Linguistic diversity and national borders of Tungusic. Shoji, H. and Janhunen, J. (eds.) *Northern minority languages: problems of survival (Senri Ethnological Studies No.44)*, 175-186. Suita: National Museum of Ethnology.
- 津曲敏郎. 2002. 『満洲語入門20講』 東京：大学書林.
- Tsumagari Toshiro. 2003. Dagur. J. Janhunen (ed.) *The Mongolic Languages*, 129-153. London: Routledge Language Family Series.
- Tsumagari, Toshiro. 2009. A sketch of Solon grammar. *Journal of the Center for Northern Humanities* 2, 1-21.
- 瓜谷良平. 2008 (2002). 『スペイン語の入門』 東京：白水社.
- Yamakoshi, Yasuhiro. 2011. Shinekhen Buryat. Yasuhiro Yamakoshi (ed.) *Grammatical Sketches from the Field*, 137-177. Tokyo: ILCAA TUFs.
- 山越康裕. 2012. 『詳しくわかるモンゴル語文法』 東京：白水社.
- 山田祥子. 2013. 『ウイグル語北方言の文法と言語接触に関する研究』 【博士論文】 札幌：北海道大学大学院文学研究科.
- Zaxarov, Ivan I. 1879. *Grammatika Man'čžurskago Jazyka*. St.-Peterburg.
- Zhao, Xiangru & Z. Zhu. 1985. *Weiwueryu Jianzhi* [=A Concise Grammar of Dagur]. Beijing: Minzuchubanshe.
- Zhong, Suchun. 1982. *Dawoeryu Jianzhi* [=A Concise Grammar of Dagur]. Beijing: Minzuchubanshe.

Third Person Marking on Finite Indicative Forms in Tungusic from the Perspective of Areal Typology

Sangyub BAEK

(Graduate School of Letters, Hokkaido University)

This study attempts to examine the difference of third person marking on finite indicative forms in Tungusic from the perspective of areal typology. According to number distinction in third person, this study employs the following typological parameters of person marking: (i) obligatorily distinct marking, (ii) optionally distinct marking, (iii) non-distinct marking, and (iv) non-person marking.

The analysis will show that third person marking on finite indicative endings in Tungusic varies in accordance with geographical distribution, showing similarities with neighboring languages. First, North Tungusic (i.e. Evenki, Even, and Negidal) is considered obligatory distinct type and this is consistent with contiguous Kolima Yukaghir, Sakha, and Russian. Second, East Tungusic languages (Ulcha, Nanay, Udihe, and Uilta) are equivalent to adjacent Mongolic (Buryat, Dagur) in that both groups are optional distinct type. Moreover, East Tungusic except Udihe coincides with these Mongolic languages in that 3PL can be equally marked by the nominal plural suffix. As far as Udihe is concerned, the verbal derivational suffix *-du* is selectively used to indicate 3PL, which is presumed to originate from the loss of nominal element **-l* as a result of phonological change. Third, South Tungusic is divided into two groups, South Tungusic 1 (Solon, Hezhen) and South Tungusic 2 (Manchu, Sibe). The former group does not retain number distinction in third person, as is the case in Kazakh and Uyghur. It is remarkable that the two different language families, without any direct contact, are commonly distributed in the Chinese territory. The latter group never encodes person category in verbal predicate structure, neither in Chinese and Khalkha Mongolian.

In conclusion, the author raises a possibility that the areal-based distinctions among third person marking on finite indicative forms in Tungusic are attributed to the influence from the adjacent languages.

(ベック・サンヤップ iyairaykere@hotmail.co.jp)